

いちはら アート コネクションズ  
**「ICHIHARA × ART × CONNECTIONS – 交差する世界とわたし」**



アートを通じて<わたし>と世界が<sup>クロス</sup>交差する

遙か3万年前、イヴの子孫たちが海を渡りたどり着いて以来、日本列島はさまざまな形で民族の移動、グローバル化を経験してきました。千葉県の中央に位置する市原市もまた、全国・世界から移り住んだ数多くの人々を受け入れ、人口の50人にひとりが海外にルーツを持っています。企画展「ICHIHARA × ART × CONNECTIONS – 交差する世界とわたし」は、市原に暮らす多様な民族的バックグラウンドをもつ人々が共に生きる社会を希求するプロジェクトです。彼らの母国から招いた4人のアーティストたちが、ワークショップやリサーチ、インタビューを通してうみだす作品は、それぞれの国の歴史・文化・風土、そしてこの地で暮らす人々の人生や思いに光を当て、私たちの想像力をひらいていくことでしょう。本展が多文化共生社会に向けて、世界と<わたし>がにつながる契機となることを願っています。

出展作家：ディン・Q・レ（ベトナム）、リーロイ・ニュー（フィリピン）、リュウ・イ（中国）、チョ・ウンピル（韓国）

※本展は、千葉県150周年記念事業「100年後芸術祭－内房総アートフェス」（総合プロデューサー：小林武史、アートディレクター：北川フラム）の一環として開催されます。

## 展覧会概要

会場	市原湖畔美術館（千葉県市原市不入75-1）
会期	2024年3月23日[土]–6月23日[日]
開館時間	平日 10:00～17:00 土曜・祝前日 9:30～19:00 日曜・祝日 9:30～18:00 *最終入館は閉館時間30分前まで
休館日	火曜日（祝日の場合は翌平日）
料金	一般：1,000（800）円/大高生・65歳以上：800（600）円 *（ ）内は20名以上の団体料金。 *中学生以下無料・障害者手帳をお持ちの方（または障害者手帳アプリ「ミライロID」提示）とその介添者（1名）は無料
主催	市原湖畔美術館 [指定管理者：（株）アートフロントギャラリー]
後援	市原市教育委員会 中華人民共和国駐日本国大使館、韓国大使館、韓国文化院
協力	市原市国際交流協会、オープンロード合同会社、energy closet
お問合せ	市原湖畔美術館 TEL:0436-98-1525 E-mail:info@lsm-ichihara.jp <a href="https://lsm-ichihara.jp/">https://lsm-ichihara.jp/</a>

## 展覧会の見どころ

### ■母国からやってきた4人のアーティストたちの表現

322万3858人—日本国内の在留外国人の数は過去最多となりました（2023年6月末／出入国在留管理庁）。地域では多民族化が進み各自治体は「多文化共生」という言葉を掲げ、市原市もその例外ではありません。約50人に1人が在留外国人であり、国籍別にみるとフィリピン、中国、韓国・朝鮮の順に多く、最近ではベトナムからの移住者も増加傾向にあります。来日した人々の背景や在住歴は様々であり、移動の中で彼らの文化やアイデンティティは形成されてきました。

本展は、そのような在留外国人が自国の文化や自らのルーツに誇りを持ってほしいという願いから始まりました。今回は、フィリピン、ベトナム、中国、韓国から世界で活躍する4人のアーティストを招聘し、市原市内で在留外国人へのインタビューをはじめとしたリサーチを行いました。各々のリサーチから生み出された作品からは、「外国人」という固定化されたイメージを超えて、そこで出会ったひとりひとりの気配や文化を感じることができるでしょう。様々なルーツを持つ人たちと彼らの母国からやってきたアーティストのアイデンティティが交差する—そこから生まれるアートが、今この多文化共生社会に生きる〈わたし〉と世界をつなげます。

### ■ベトナムと日本の「絆を結ぶ」巨大キルト

ベトナム戦争によりボートピープルとしてアメリカに脱出し、移民として暮らした経験ももつベトナムを代表するアーティスト、ディン・Q・レ。彼は、市原に生きるベトナム人にインタビューを重ねるなかで、いかに彼らが故郷の家族を思い、人と人とのつながりを大切するかを知り、この地で新たなつながりが生まれることを願い、「絆を結ぶ」というタイトルのもと、ベトナムで集めた古着と、市原で集めた古着を、日本人とベトナム人、さまざまなルーツをもつ外国人が協働して巨大なキルトとラグを作り上げ、インスタレーションします。

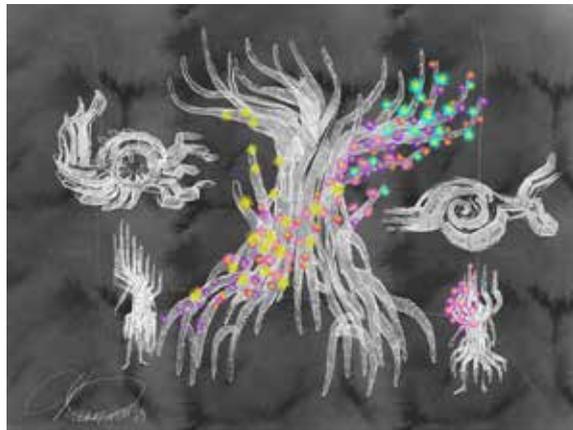


ディン・Q・レ 《絆を結ぶ》



### ■フィリピンの神話的世界と環境問題をつなぐ大規模インスタレーション

かつて「スモーキーマウンテン」と呼ばれるゴミの山で知られたフィリピン。世界の国際展でも活躍するアーティスト、リーロイ・ニューは、廃棄物を使って、身に着けることができるウェアラブル・アートから大規模なインスタレーションまで多彩な作品をつくり、欧米による植民化以前のフィリピン独自の芸術表現を探究してきました。本展では、市原で集めた何千本ものペットボトルと竹でできた巨樹バレテを軸に、フィリピンの民話・神話的世界をSF的なインスタレーションとして展開します。廃棄物でできた空飛ぶ宇宙船、ウェアラブル・アートを身に着けた”ヒト“。それは、現在の地球規模での環境問題に注意を喚起するものでもあるのです。



【ブランドローイング】リーロイ・ニュー《多次元港としてのバレテ》

### ■伝統と現代——長い交流の歴史をもつ中国、韓国のアーティストたち

日本にとって最も長い交流の歴史をもつ中国、そして朝鮮半島。困難な時代を経ながらも、私たちの日本の文化は深く両者の影響のもとに成立してきました。中国のアーティスト、リュウ・イは、市原に住む中国人のライフストーリーの聞き取りを通して、異国の地で自らの固有性を保ちながらも、居場所を求める中国人の魂の旅を、中国古来の水墨画の技法を活かしたアニメーション作品として描きだします。一方、韓国のチョ・ウンピルは、かの国で特別な色であり、愛されてきた「青」をテーマに作品をつくり続けるアーティストです。今回は湖に触発された美術館の内外に青の世界を現出させます。



リュウ・イ《はじめまして》  
※3/9更新



チョ・ウンピル《私の青》

## 作家紹介



## ■ディン・Q・レ (DINH Q. LÊ)

1968年、ベトナム、カンボジアとの国境付近のハーティエン生まれ。ホーチミン在住。1978年、ポートピープルとしてベトナムを脱出、家族でアメリカへ移住。カリフォルニア大学サンタバーバラ校卒業後、ニューヨークのスクール・オブ・ヴィジュアル・アートで写真を学び、修士課程修了。

作品には彼のルーツであるベトナムやベトナム戦争が色濃く反映されている。2015年に森美術館で開催された個展「ディン・Q・レ展：明日への記憶」では、ベトナム戦争終結から40周年の節目に、歴史上で取り上げられてこなかった市民の声を拾った作品の数々を発表。2019年の瀬戸内国際芸術祭においては、粟島でのリサーチと地元住民へのインタビューを元に《この家の貴女へ贈る花束》というインスタレーションを発表した。

主な発表に、ドクメンタ13 (2012)、シンガポール・ビエンナーレ (2008、2006)、第50回ヴェネチア・ビエンナーレ イタリア館 (2003)がある。エリザベス・リーチ・ギャラリー (2023、2021) ケ・ブランリー美術館 (2022)、ニューヨーク近代美術館 (2010) 等で個展を開催。

## 参考作品

上：《抹消》(2011)

下：《この家の貴女へ贈る花束》(2019)



## ■リーロイ・ニュー (Leeroy New)

1986年フィリピン南部ミンダナオ島生まれ。マニラ在住。フィリピン大学美術学部卒業。

身に着けることができるウェアラブル・アートから大規模なインスタレーションまで、多彩な作品をつくる。また、「廃棄物」を素材として着目し作品制作を続け、フィリピンの芸術教育における欧米のスタイルから脱却し、植民地以前のフィリピン独自の芸術表現を探求している。2023年9月には、本展のための作品制作にあたり市原市内で海外にルーツを持つ大人や子どもとのワークショップを実施した。

主な発表に、ホワイトトリエンナーレ (2022)、ドバイエキスポ (2020)、シドニービエンナーレ (2022) 等がある。福岡アジア美術館のアーティストインレジデンス (2022) に参加。主な受賞に、アテネオ・アート・アワード (2018)、フィリピン文化センター・13アーティスト・アワード (2012) がある。ニューヨークのアジアン・カルチュラル・カウンシルの芸術助成金採択 (2015)。2011年には、レディー・ガガの「Marry the Night」のミュージックビデオに、彼の彫刻したシリコン・ビスチェが登場した。

## 参考作品

上：《polyp》(2015)

下：《Aliens of Manila: New York Colony》(2019)





### ■リュウ・イ (Liu Yi)

1990年中国浙江省寧波市生まれ。杭州在住。2016年、中国芸術学院修了。自身の個人的な経験や人生、そしてアニメーションやマルチメディアを通じて見たリ聞いたり理解したことからインスピレーションを得ている。

彼女の作品手法は、中国初期のアートフィルムを基盤にしており、空間インスタレーションなどの手法を用いて、アニメーション作品や国境を越えた舞台作品を数多く制作している。

主な発表に、オランダ・アニメーション映画祭 (HAFF) (2017) 選出、上海都市空間芸術祭 (SUSAS) (2019) がある。華国際短編映画祭で特別推薦賞受賞。ソウル美術館の「SeMa Nanji Residency Project」(2018) に招待、フランス、アンジェのフォンテヴロー王立修道院のアーティスト・レジデンス (2019) に参加。また、キプロス・アニメーション映画祭 (2019) で審査員を務めた。



#### 参考作品

《The Earthly Men》(2017)

《The Earthly Men》(2021)



### ■チョ・ウンピル (CHO EUN PHIL)

韓国釜山生まれ、在住。釜山大学校彫刻科卒業、スレード美術学校修士課程修了 (ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)。

独特な青を使ったインスタレーションを中心に、映像作品などを手がける。「青を主な造形要素として捉え、日常的な素材を非日常的な空間に転換する」ことに挑戦している。

青は、韓国の伝統的な「五方色」に含まれ、彼女の作品には、韓国の伝統と文化を垣間見ることができる。

主な発表に、釜山市立美術館 (2008、2012)、ソウル・オリンピック美術館 (2015)、江原道国際トリエンナーレ (2021)、金剛ネイチャー・アート・ビエンナーレ (2020) 等がある。主な受賞に、釜山ビエンナーレシーアートフェスティバル大賞 (2013)、春川文化放送現代韓国彫刻招待展金賞 (2016) 等がある。



#### 参考作品

《내방의 존재하는 사물들과는 다른것》(2018)

《Choppy Castle》(2013)



## 関連イベント

### ●トークショー「隣人のあなた『移民社会』日本でいま起きていること」

ゲスト：安田菜津紀（認定NPO Dialogue for people 副代表／フォトジャーナリスト）

日時：2024年4月13日（土）13:00-14:30

会場：市原湖畔美術館多目的ホール

定員：70人（要予約）

参加費：1,000円（入館料別途）

日本国内には様々なルーツの人々が暮らしていますが、外国人政策ははまだ、多くの課題を抱えています。中には入管の収容に苦しんだり、深刻な差別に直面する人々もいます。命の危険から逃れてきても、ほとんど難民認定を受けることができません。そんな日本社会で「共に生きるとは何か」ということを、安田さんが取材で出会った人々の声、そして家族の歩んできた歴史も交えて考えていきます。



#### 安田 菜津紀 プロフィール

1987年神奈川県生まれ。認定NPO法人 Dialogue for People（ダイアログフォーピープル/D4P）フォトジャーナリスト。同団体の副代表。16歳のとき、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとしてカンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材。現在、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。著書に『国籍と遺書、兄への手紙 ルーツを巡る旅の先に』（ヘウレーカ）、他。上智大学卒。現在、TBSテレビ『サンデーモーニング』にコメンテーターとして出演中。

### ●マルシェ「世界の食と文化が香るマルシェ&ピクニック」

出店者：エスニック料理店、アジア雑貨店、千葉・市原在住の海外ルーツの人たち等

日時：2024年3月24日（日）10:00-15:00

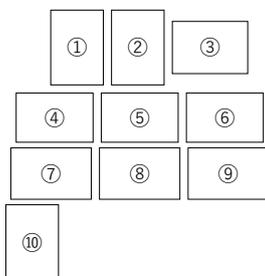
会場：市原湖畔美術館芝生広場

共催：千の風パレード

\* イベントの詳細は、HPでお知らせいたします。



広報用画像



- ①、②、③ デイン・Q・レ《絆を結ぶ》
- ④【ブランドローイング】リーロイ・ニュー《多次元港としてのパレテ》
- ⑤リュウ・イ《はじめまして》
- ⑥チョ・ウンピル《私の青》
- ⑦デイン・Q・レ プロフィール写真
- ⑧リーロイ・ニュー プロフィール写真
- ⑨リュウ・イ プロフィール写真
- ⑩チョ・ウンピル プロフィール写真



## アクセス

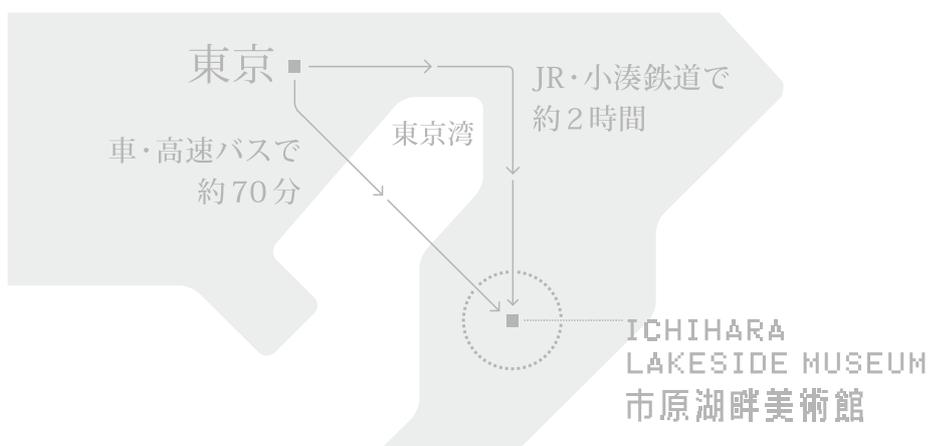
所在地：〒290-0554 千葉県市原市不入75-1

鉄道で：JR 内房線五井駅乗り換え 小湊鉄道「高滝」駅より徒歩20分 / タクシー5分

お車で：圏央道「市原鶴舞IC」より約5分

高速バスで：東京駅・羽田空港・横浜駅より約1時間

(市原鶴舞バスターミナルよりタクシー 約5分)



## 広報についてのお問い合わせ

市原湖畔美術館 三浦

tel:0436-98-1525 fax : 0436-98-1521

press@lsm-ichihara.jp www.lsm-ichihara.jp

美術館のSNSでは、美術館や展覧会情報を発信しています。

Facebook : @ichiharalakesidemuseum

Instagram : @lsm\_ichihara

X : @LSM\_ICHIHARA

